

安部公房『密会』論

——ポストモダンの監視権力に抗して——

片野 智子

「キーワード ①安部公房 ②密会 ③フリーコー ④監視権力 ⑤見られたい欲望」

一、問題提起

安部公房の『密会』（新潮社書き下ろし、一九七七年十二月）は、ある夏の日突然やって来た救急車に連れ去られた妻を連れ戻すために巨大な病院を訪れた「ぼく」が、下半身を改造し四つ足の馬となった副院長や、試験管ペビーの女秘書との奇妙な出会いを通して、自らもまた病院内に迷い込んでいく長編小説である。筆者は以前、『密会』における盗聴システムが規律訓練型権力の範型としてのパノプティコンと対応する要素を多く含んでいることを明らかにした上で、副院長とのノートⅠ、Ⅱにおけるやりとりと、盗聴システムを通して聞こえてくる患者たちの告白を通して、「ぼく」が見る欲望と見せない欲望に目覚めていく過程が描かれていることを論じた。一方で、ノートⅢ以降になると、「ぼく」の内部では見られたい欲望が増大しはじめることも、その欲望が近代的な規律訓練型権力から逸

脱する可能性を孕んでいることも提示した^{注1}。そこで本稿では、ノートⅢと付記を中心に論じることと、「ぼく」や病院の人々が抱えている見られたい欲望が、ポストモダンにおける新たな監視権力のかたちや、そこで起きる自己の断片化という現象と、いかに響き合っているのかを考察していく。それによつて、『密会』という作品が、近代的な規律訓練型権力のみならず、ポストモダンに対応する権力まで含めた、極めてアクチュアルな問題を先取りした作品であることを明らかにするつもりである。その上で、そのような権力に対抗する方法についても、結末部の「ぼく」の姿から探ってみたい。

二、見られたい欲望——規律訓練型権力のからの逸脱

まず、ノートⅠからノートⅡにおける「ぼく」の記述の変化と、そこから窺える「ぼく」の欲望の変遷について概観しておきたい。妻を取り戻すべく病院を訪れた「ぼく」は、三日目の

朝に副院長から、一冊のノートと病院にやって来てからの「ぼく」自身の行動を録音したカセットテープを手渡される。副院長は妻の行方を探るために、テープの内容をノートに書き起こすことで、「ぼく」自身の行動を整理してみようにと勧めるのだが、副院長の真の目的は、「ぼく」が病院に訪れてから二日目の午後に起きた警備主任殺害事件の犯人を捜すことであつた。つまり、「ぼく」の妻がさらわれたという証言は嘘で、はじめから「ぼく」は警備主任を殺害するために病院内に潜り込んできたのではないかと副院長は疑っているのである。そのため「ぼく」は、自らが犯人ではないことを証明するために、自らの行動をその時の心情までも含めて、事細かく記述していくところがノートⅡになると、副院長が「ぼく」にノートを書かせようとする目的は一変する。というのは、病院を訪れてから四日目の朝、「ぼく」は副院長が執着している溶骨症の娘を衝動的に誘拐し、隠れ家に閉じ込めてしまふのだ。副院長はこの誘拐犯が「ぼく」ではないかと疑い、ノートⅡを書かせることで娘の行方を突き止めようとするのだが、「ぼく」は副院長の疑いを否定しつつも煽るという二律背反の記述をすることで、なんととしても娘を取り返そうとする副院長と心理的な駆け引きを行うのである。

こうした「ぼく」の記述の変化は、病院内の至るところに張り巡らされている盗聴システムと、それが象徴する規律訓練型権力に深く関係している。規律訓練型権力とは、不可視の視線に見られている不安を個人に植えつけることで内省を促し、自

らが規律に従っているかどうかを自分自身で監視させるよう仕向ける権力のことである。その範型がパノプティコンと呼ばれる一望監視装置であり、『密会』の「存在しているというだけで畏怖され、服従心を起させる」盗聴システムは、いつ何処から自分の行動を監視されているのか解らないというその不安から、患者たちを自ら規律に従うよう行動させているという点で、パノプティコンに通じる面を持つているのだ。^{注2}そして、ノートⅠにおける「ぼく」もまた、盗聴システムにいつ自分の行動を監視されているか解らないという不安から、ノートの読み手である副院長に、自らの行動の理由を逐一説明しようとする。それは自らの身にかけられた殺人犯の嫌疑を晴らすためであるが、その過程で「ぼく」は、「馬のやつにいっぱい食わされたような気がして仕方がない」「いま必要なのはアリバイなんかじゃない。妻の行方に関する手懸りなのだ」というように、副院長への不信任を進んで告白することで、かえって自ら検証した自身の内面までも率直に曝け出していくことになるのである。これは、規律訓練型権力のもとで作動する告白の規制に通じている。先にも述べたように、不可視の視線のもとで個人は自らを絶えず監視し反省することを強いられるが、この反省を告白することで、個人の自己監視≡自己検証はより強化されるのである。^{注3}つまり、盗聴システムにいつ見られているか解らないという不安から、自らの心情まで詳らかに書いてしまふ「ぼく」の姿には、不可視の視線に晒された個人が、自らの内面をチェックし、それを告白することで、進んで権力に服従する主

体に訓育されていく過程が現れているのだ。

ところが、ノートⅡになると「ぼく」の記述には、真偽が不確かな箇所が多く見られるようになる上、「ぼく」自身の心情や行動の理由についても明らかにされず、空白が目立つようになっていく。ここでの「ぼく」の狙いは、真実を曖昧にすることと、自身の内面の真理を語らせ権力に自ら従うよう仕向ける告白の機制を無力化することと同時に、ノートの空白を増やし、自らの存在を極力透明なものにすることで、今度は副院長の告白を一方的に聞く側に立つことにある。実際に、副院長はノートⅡを読んでも「ぼく」が何を考えているのか解らないことに焦り、苛立ち、最後にはノートⅡを書かせたのは溶骨症の娘の行方を探るためであることを、「ぼく」に向かって進んで告白してしまうのである。ここから解することは、「ぼく」はノートⅠからノートⅡに進むことで、見られているかもしれない不安から、見る欲望と見せない欲望に目覚めていくということだ。換言すればそれは、誰にも見られることなく、一方的に見る存在になりたいということである。そしてそのことは、ノートⅡになると「ぼく」が盗聴システムの警備主任に抜擢されたことと響き合っている。「ぼく」は見えない盗聴器に向かって延々と語られる患者たちの告白を聞いている内に、「その気になりさえすれば、病院中を足元に這いつくばらせることができそうだと権力欲に目覚めていく。要するに「ぼく」は、盗聴システムと同じ不可視の視線そのものとなることで、一方的に他者を支配することを欲望しはじめるのである。

以上が前回の論文でも考察したノートⅠとノートⅡにおける「ぼく」の姿だが、しかしノートⅢになると、「ぼく」は一転して誰かに見られたいという欲望を露わにしていくことになる。まずはノートⅢを書いている「ぼく」の時間軸から見ていくと、病院を訪れて五日目の晩にノートⅡを副院長に渡した「ぼく」は、溶骨症の娘の行方をめぐって言い争いになり、嘘発見器にかけられる。なんとかその場を切り抜けた「ぼく」は、副院長が差し向けた追っ手の警備員を振り切り、盗聴システムの電波が届かない地下道の隠れ家で、実は四日目の早朝に病室から誘拐していた娘と再会する。ノートⅢはその次の日、つまり六日目の正午に書かれはじめたものである。そのことは、三日目に書かれたノートⅠで「四日後」、つまり七日目にはじまるとされていた病院の記念式典の「前夜祭」が、「六時間後にひかえ」ているという記述からも解るだろう。

ここで注目すべきは、ノートⅢの冒頭で「ぼく」が、「今度こそ真相をぶちまけてしまおう」と宣言しながらも、「これまでの二冊は馬の注文だったが、今度のは依頼主がいらない」と書いていることだ。すなわち、ノートⅠでは自身の内面を告白する相手である副院長がいたのに対して、ノートⅢではいくら「真相」を告白しようとしても、それを確実に聞いてくれる相手がそこには存在しないのである。現に「ぼく」は「誰に読んでもらえるのか、今のところまだ当てはない」と書いている。ところが、それにも関わらず、「ぼく」はノートを書くことを一向に止めない。それどころか、ノートⅡでは意図的に隠して

いた溶骨症の娘を誘拐したいきさつや、五日目の副院長との対決について自ら話しはじめるのである。そこから窺えるのは、とにかく自分の告白を誰でもいいから誰かに聞いてもらいたい、要するに誰かに見られたいという欲望に他ならない。

しかも、そうした見られたいという欲望の肥大化と並行して、「ぼく」の記述には不確かな部分が多くなっていくことも重要である。たとえば、ノートⅢには「弁明ではなく、ぼく自身、こうして八号室の娘と人目をしのびながら、しかも妻の行方を追っているという矛盾した行為に、じゅうぶん納得のいく説明をつけられずにいる」という下りがあるが、ノートⅡで溶骨症の娘を誘拐したことについて意図的に書かないようにしているのとは違って、「ぼく」には自分自身の行動を説明することができなくなっているのだ。要するに、「ぼく」自身のアイデンティティー、換言すれば自分が何者であるかということに揺らぎが生じているのである。続く「納得できないのはなにも僕だけではないはずだ」という言葉からは、「ぼく」が誰かに読まれる「見られることを期待してノートⅢを書いていることが窺えるだろう。すなわちここには、「ぼく」がそうしてノートの読者に語りかけることで、自分では説明のできない行動の理由を、誰かに代わって読み解いてもらうことを期待している可能性があるのだ。

しかも、そうした見られたいという欲望は、「ぼく」だけではなく、病院内にいる人々の多くが抱えているものでもある。例えば「ぼく」は、入院患者たちの中には、副院長が開発した

盗聴システムに自分たちが支配されていることに、恐怖からくる「服従心」のみならず、「嗜虐的な安心感」を覚える者がいることを指摘している。この盗聴システムは、病院内の「二百数十か所におよぶ常設盗聴器と中継機」によって捕捉された、病院内の人々の性行為の声から生活音まで、ありとあらゆる音を盗聴・録音するというものだが、患者たちの中には「FM発信機を体につけて私設放送局になり、排泄音を聞かせたり、嘲笑をあげせられながら人前で手淫をしてみせる者」が「数百人」規模でいるのだという。また、「ぼく」が誘拐することになる溶骨症の娘は、出会い頭に「ぼく」の前で自慰をしてみせようとする。「ぼく」はそのような娘の振る舞いは、彼女に執心している副院長に無理矢理関係を強要されているためだと考え、「したくもないことを、無理にすることなんかあるものか」と訴えるのだが、娘は「したいんだよ」と意にも介さず答えるのである。

また、溶骨症の娘の世話をしている婦長の話によれば、彼女はベッド下に備えつけられた盗聴器に向かって自慰の際の「猫のしゃっくりみたいな声」をわざと聞かせているのだという。何故そんなことをするのかと問う「ぼく」に、「こうしている時が、一番かわいい」と副院長から言われたのだと答える娘の姿からは、誰かに見られて欲情されることが、彼女自身のアイデンティティーになっていることが窺えるだろう。そこには、骨が少しずつ外部へと溶け出し最後には自らの輪郭さえも保てなくなるといふ、まさに内からも外からも自らの統合性を喪失

する病に冒された少女の、副院長や「ぼく」という自らに欲情を向けてくる男たちの眼差しを介して、自分自身が何者であるかを確かめたいという、切実な希求が存在しているのだ。そしてそのような願いは、盗聴システムに監視されていることに「安心感」を抱く患者たちのものでもあると考えられる。このように、病院内の患者たちは、「ぼく」と同様に誰かに見られたい、更に言えば見られることで自分自身が何者かを確認したいという欲望を強く抱いているのだ。

では、こうした見られたいという欲望は、規律訓練型権力の枠内に収まるものなのだろうか。先にも述べたように、規律訓練型権力とは不可視の視線のもとで個人を自ら権力に服従するよう主体化するものであり、そこで行われる自己監視^{注5}自己検証は告白の規制によってよりいっそう強化される。そして、『密会』のノートⅠからノートⅡにおける「ぼく」の記述の変化には、不可視の視線によって一方的に見られる（告白を行う側）から、不可視の視線に成りかわることで一方的に見る側（告白を聞く側）へと移行しようとする「ぼく」の欲望が現れていた。権力に服従する側から権力の側へと上昇したという違いはあるにせよ、そこでの「ぼく」は規律訓練型権力構造の内側に閉じ込められているのである。

だが、ポストモダンの社会において、こうした規律訓練型権力の効力は、完全には言わないまでも、急速に失われている。そこには、社会全体で共有されているような規範や倫理、いわゆる「大きな物語」の効力が弱まったことが深く関わっている^{注4}。

というのも、パノプティコンの監視塔から送られてくる不可視の視線によって監視されている人々は、自らが規律に従っているかどうかを自分自身でチェックし、さらにそれを告白することによって、自分がどのような人間かというアイデンティティーを手に入れることができたが、その従うべき規律^{注5}規範がなくなってしまうえば、一体何に基づいて自分を監視すればいいのか解らなくなってしまうからだ。そして、そのような「大きな物語」の失墜によってアイデンティティーに揺らぎを抱えることになった人々は、見られている不安よりもむしろ、見られたいという欲望ないし見られていない不安に駆り立てられるようになった。これについて大黒岳彦は、ネット社会とは「露出狂社会」であり、恋人同士のキス写真や上司から叱責される動画がアップされるなど、人々は自らのプライバシーを不特定多数の他者に向けて進んで公開していることを指摘している^{注6}。

こうした見られたい欲望を抱えた人々は、規律訓練型権力の構造からは明らかに逸脱した位置にいる。なぜなら、パノプティコンが効力を持つには、不可視の視線に見られることへの不安から、個人が自らを監視し、その結果を告白する必要があったが、人々はいまや不可視の視線も、自己監視も前提にすることなく、誰かに見られたい、見られることで自分が何者かを確かめたいという欲望から、進んで告白しはじめるからだ^{注4}。『密会』において描かれる、見られることで誰かに自分を規定してもらおうとする欲望を抱えた「ぼく」や患者たちの姿は、まさにこうしたポストモダンにおける問題を先取りしたものに他ならな

いのである。

だが一方で、ポストモダンにおいても、パノプティコンにおける自己監視が完全に効力を失ったわけではない。ただし、人々が従うのが社会的な規範や倫理から、自分自身の趣味や好みへと変化する^{注8}ことで、自己監視はごく緩いものへと変化する。すなわち、与えられた規則に従っているかどうかではなく、与えられた選択肢の中で、それが自分の好みに合うかどうかにかに従って、人々は行動するようになるのである。その具体的な例として、デパートやスーパーでのショッピングが挙げられるだろう。人々は大量の商品を見て回りながら、それが自分の好みに合うものであればその都度反応し、購入していく。そうした好みとは、ファッションと同じで極めて移ろいやすく、一貫性のないものになりやすい。ジークムント・バウマンはこれについて、「消費社会をうごかす精神は、具体的必要性ではなく、欲望」であり、「一時的で変化しやすく、とらえどころがなく気まぐれな、根本的には自己完結である欲望」であって、そのような欲望に基づいて形成される個人のアイデンティティーは「一過性的、非固定の」で、要するに断片的なものになると指摘している^{注9}。

ここで再び『密会』に戻ると、妻の行方を突き止めるという本来の目的から離れて、溶骨症の娘を衝動のままにさらし、隠れ家に閉じ込めてしまう「ぼく」の姿は、その都度浮かんできた欲望に振り回されているポストモダン的な自己のありように通じている。そして、「ぼく」の記述はそれと並行するように

して整合性を失っていく。例えば、『密会』ではノートを書いて現在の「ぼく」と書かれている過去の「ぼく」（Ⅱ「男」という二つの時間軸が存在しているが、ノートⅠとノートⅡでは、冒頭と末尾、そして地の文の途中で挿入される括弧内において、書いている「ぼく」自身についての記述がなされると、^{注9}「男」という三人称はもはや使用されなくなり、「ぼく」という一人称で統一されるうえに、本来括弧内において語られるべき、書いている〈現在〉の「ぼく」についての記述が地の文にもたびたび現れるようになる。更に、ノートⅢでは五日目の晩にノートⅡを副院長に渡しに行った際の回想が挿入されているが、その途中で「五年ほど前、馬の指導のもとに、ある実験が行われた」と、副院長がインポテンツの治療のために盗聴システムを開発するに至った経緯が語られたしたり、「そう、じつは一冊目のノートを書きはじめた時点で、警備主任はすでに死亡していたのだ」と、副院長が死んだ警備主任の下半身を利用して馬になったことが明かされたりする。しかも、そうしてそれぞれ異なる時間軸の話をしていたにも関わらず、「さて、どこまで進んだんだっけ。そう、馬が最後の鯨を頬張ったところだった」と、またもや唐突に「ぼく」と副院長の会話する場面に戻るのだ。

このような、現在と複数の過去が入り乱れ、過去―現在という連続した時間の流れを攪乱するような語りは、ノートⅢの随所に見受けられる。そこからは、書くことを通しても統一的な

自己のありようをよはや保てなくなり、それ故に誰かに見られることで自分の行動の意味を説明づけてもらいたいとする「ぼく」の姿が浮かび上がってくる。ここから、『密会』が露わにしているのは、一時的で可変的な自己と、見られることによる承認への欲求を抱えた自己という、ポストモダン的な二つの自己の関連性であることが解るだろう。すなわち、「ぼく」の振舞いが示しているのは、利他的な欲望に従って行動することによって自己が流動化するからこそ、誰かに見られることで、そのような自己が何者であるかを確かめずにいられなくなることなのだ。このように、一時的で可変的な欲望に従って断片化する自己と、見られたい欲望に従って何者であるかを確かめたい自己という、ポストモダン的な二つの自己が結合しようということ。それこそが、ノートⅢにおける「ぼく」の記述が露わにしていることに他ならない。そして『密会』は、単にポストモダンの二つの自己を先取りしているだけではなく、今日の社会において、この二つの自己が秘かに結びつき、人々を新たに拘束しているのではないかと問いかけてさえいるのだ。

ただし、ここでもう一つ注意すべきは、盗聴システムの監視の力が弱まったために、「ぼく」や患者たちの見られたい欲望が増大したわけではないということだ。これは一見すると矛盾しているように見えるが、実はそうではない。というのは、ノートⅢの時点でも、盗聴システムが「手に負えないほど巨大化し、さらに休みなく情報を吸収しつづけている」ことを「ぼく」が指摘しているように、盗聴システムはその監視の力を弱めると

ころか、むしろよりいっそう強化されているように見えるからだ。そして、先にも述べた通り、患者たちはそうした盗聴システムにいつどこで見られているのか解らない不安を感じるところか、むしろ自分から自慰に耽るなど、見られたい欲望をむき出しにしていくのである。つまりそこでは、盗聴システムの監視の力が強まるほど、かえって人々は見られる不安より見られたい欲望を強めていくという逆転現象が起きているのである。何故そうした事態が起きるのか、そこには盗聴システムの持つパノプティコンとはまた別の側面が深く関わっているが、次章ではそのことについて考察したい。

三、盗聴システムと自己の断片化

盗聴システムが持つパノプティコンとは異なる別の側面を論じるにあたって、第一に注目したいのは、病院を訪れた三日目に副院長に手渡された、盗聴システムが録音した「ぼく」の声が収録されたテープを聞いた「ぼく」自身の反応である。

盗聴器や尾行者に、刻まれ、皮をむかれ、探りまわされているのは男だった。舌打ち、咳ばらい、調子つ外れの鼻歌、咀嚼音、懇願、心にもない追従笑い、げつぶ、鼻水の音、おずおずとした申し開き……そんな破片に寸断され、陳列されている見世物男。しかもその男というのが、ほかでもない、消えた妻を探して右往左往しているこのぼく自身だったのである。

ここでの「破片に寸断され」という言葉は、要するに「ぼく」という人間が、統一的な人格を持つ一人の存在ではなく、単なる音声データの束へと変えられていることを意味している。これと同様の感覚を「ぼく」は、実際に盗聴システムを利用して、病院内に仕掛けられた盗聴器が捉える人々の音声を盗み聞きすることで、妻の行方を探ろうとする場面においても起こしている。「消えては現れ、現れては消え」る「べらぼうな音の氾濫」は、「追従、怒り、不満、嘲笑、ほのめかし、妬み、ののしり」というあまりにも多様な音の断片によって構成されており、それを聞いているうちに「ぼく」は時間が「モザイク」のように感じられてしまう。すなわち、「ぼく」は人々が一貫した人格を持つ個人としてではなく、動き回るたびに落としていく音声の断片へと寸断されてしまっているのを直に聞くことで、自らもまた連続的な時間感覚を喪失し、統一的な自己の私たちを保てなくなってしまうのである。

こうした自己の断片化の感覚は、病院内の患者たちにも共通するものだろう。例えば、患者たちの間では「小型FM発信器を、他人の軒下や、ベッドや、化粧箱の底や、サンダルの中や、傘の柄などに仕掛けるのは、ほぼ習慣化」していることを「ぼく」が指摘しているが、四六時中他者を盗聴し覗き見ている患者たちは、自らもまた他者によってそうされていることを意識せざるを得ないはずだ。患者たちは何か行動するたびにそれを盗聴され、あちこちの録音媒体に保存され、再生され、時には

性的な商品として売り出されたりする。そこではまさしく、人間は一つ一つの音声に断片化されてしまっているのである。

このような事態は、実はポストモダンに発展した新たな監視権力の問題に通じている。そのことを理解するために、ここでは阪本俊生のプライバシーについての議論を参照したい。阪本は、近代の規律訓練型権力、とりわけパノプティコン型の権力構造のもとで産出されるのは、「社会規律に内面から従うよう自己コントロールする主体」であるとして、そこでの個人は一貫した自己を持ち、自らの行動や思考を自分自身で統御することができると信じられていたと述べている。そうした自由な主体としての自己という幻想は、一方的に個人の内面を暴き立てたり、外から見た勝手な人格イメージを個人に付与したりする行為への強い嫌悪感をもたらし、ここからプライバシーという概念、換言すれば他者に自らの内側を見せない欲望も生じたのだと阪本は指摘している。ところが、阪本によれば、徹底した個人情報収集と解析によって監視の力がますます強まったポストモダンの社会において、プライバシー概念は近代とは異なるものへ変化しているという。個人情報とは氏名、生年月日、住所、またはクレジットカードの購買履歴や携帯電話の位置情報など多岐に渡るが、要するにある人が何か行動するたびに落としていく、その人自身の（情報の）断片である。各データベースでは、収集した個人情報了他者の情報と比べたり、あるいは本人自身の過去の情報と組み合わせたりすることで、個人の趣味嗜好を読み取ったり、時には未来の行動を予測することす

注11

ら可能にする。そこでは、個人は自由意志を持つ主体ではなく、単なる個人情報束へと、それも情報の種類があまりにも多様かつ分散しているために、何かあれば簡単に解体してしまうような、極めて面白い統一性しか持たない存在へと還元されてしまっているのだ。しかも、そうした情報化の進んだ今日の社会において、個人はむしろ進んで監視を受け入れることで、自らが何者であるかを情報システムに決定づけられようとしている。すると阪本は述べている。すなわち、近代では個人の自己は自らの意思によって決定づけられるものと信じられていたが、今やデータベースを通して、そこで蓄積された様々な個人情報の断片から構成されるものとなっているのである。ここから、プライバシー概念は個人の内面の問題ではなく、収集された個人情報と正しく管理されているかという安全性への問題へと移行しているというのが阪本の主張なのだ。

こうした阪本の議論を踏まえると、『密会』の盗聴システムは、一方では不可視の視線によって個人を自ら監視する主体に変えつつも、他方では個人を音声データの束へと還元してしまうことで、その自己を断片化するという効力を持っている。自己の断片化を引き起こした患者たちは、結果として盗聴システムによる監視を進んで受け入れ、見られたい欲望を増大させていく。そこから浮かんでくるのは、自身の行動を自ら監視する主体への志向などではなく、むしろ見られることで他者に自分が何者かを決定してもらおうとする客体化への欲望に他ならない。このように、『密会』の盗聴システムは、ポストモダンにおける

個人情報を利用した新たな監視の形態と通じる点をも持ち合わせているのである。

しかも問題なのが、こうした個人情報による自己の断片化は、先に取り上げたポストモダンにおける一時的で可変的な欲望と、それに基づき行動することで断片化していく自己のありようと表裏を成しているということである。つまり、消費社会の面では次から次へと欲望していくことでアイデンティティーが変化していくという、内側での自己の断片化が進行しているのと同じに、ネット社会の面ではますます強化された監視システムによって個人情報の束へと還元されるという、外側からの自己の断片化が起きているということだ。この内と外からの断片化とどこかで感じ取り、かつての一貫した主体というものがもはや解体されていることに薄々気づいているからこそ、人々は他者に見られることで自己を確かなものにしようとする。しかしそのとき他者に見られたい自己とは、一時的で可変的な欲望にかられて断片化する自己でしかないうえに、ネットに自己のプライバシーをアップしてしまえば、それはただちに情報の束へと断片化されてしまうだろう。つまり内と外で進行する自己の断片化は、見せることによる確かなアイデンティティーの獲得を欲望させるが、その欲望に従って見せた結果、自己は再び粉々に断片化し、それがまた見られたい欲望を惹起するという悪循環が、そこにははつきりと生じているのである。

そして、そのような悪循環を露わにし、それはポストモダンの社会で起こっている問題であることを提起するのも、やはり

『密会』のこれまでの展開である。現に病院内の患者たちは、盗聴システムによってあらゆる行動を録音され、そこから抽出された性的な音声を手帳として売り出されるという、音声データへの断片化を被っているが、まさにそのことが彼らをよりいっそう露出行為へと駆りたて、その露出がテープとなつてまた売られるという、終わりのなき円環に閉じ込められているのだ。同様に、盗聴システムによって断片化された自己を突きつけられた「ぼく」は、その電波の届かない隠れ家に逃げ込んだ後でさえも、誰かに見られたいという欲望に突き動かされてノートⅢを書いている。だが、書くことを通して第三者に自分を見せるといふ行為、それこそがまさに今日の社会におけるブログやSNSでの露出と同様に、情報への断片化となることは言うまでもないだろう。このように、『密会』の物語では、内側での自己の断片化のみならず、外側からの自己の断片化までもが見られたい欲望を惹起し、それが負のサイクルを引き起こすということが、はつきりと示されているのである。

では、こうした終わりのなき悪循環から、規律訓練型権力における主体、要するに一貫性を持つ自由な自己（という幻想）に縋るのは異なるかたちで、抜け出す方法はないのだろうか。そこで次章では、ノートⅢの後の付記を中心に考察することで、「ぼく」の見られたいという欲望と、そこから生じる新たな自己の可能性について提示したいと思う。

四、見られたい欲望

『密会』のラストを飾る付記は、隠れ家を出た「ぼく」と溶骨症の娘が前夜祭へと向かうところから始まる。女秘書の手引きで前夜祭の会場に潜り込んだ「ぼく」は、そこで開催されていたオルガスム・コンクールに出場中の〈仮面女〉が、失踪した妻ではないかとの疑いを抱くものの、副院長に無理やりコンクールに出場させられそうになり、思わず逃げ出してしまふ。結局、警備員に捕まった「ぼく」は病院の地下に監禁され、少しずつ病気が悪化していく溶骨症の娘を抱きしめながら、「明日という過去の中で、何度も確実に死に続ける」ことになるのである。この意味深なラストについて考える前に、地下に閉じ込められた「ぼく」が「自分が病気であることを認め、申し分のない患者になること」を、盗聴器に訴えかける場面に注目したい。ここでの「申し分のない患者」は、一方的に見られる側になることを意味しているように見えるが、他方で、「ぼく」は溶骨症の娘を抱く際には、わざわざ盗聴器の電池を抜いてもいる。それは、「いずれは盗聴器の電池も切れ、ぼくは誰にも気兼ねなしに娘を抱きつづけることになるだろう」という言葉が示唆しているように、誰かに娘との性行を盗み聞かれたり、覗かれたりしているかもしれないことに對する不安からである。つまり、「ぼく」の中には誰かに見られたい欲望と同時に、見られたいくないという欲望もまた存在しているのだ。

そのような「ぼく」の矛盾した姿は、前夜祭に潜り込んだ場

面においても描かれている。例えば、「ぼく」はオルガスム・コンクールに出場している〈仮面女〉が自分の妻か確かめるために、自らもコンクールに参加することを副院長に持ち掛けられる。その際、「ぼく」は勃起してしまいが、舞台上上がり「今度はこちらが見られる番だ」と考えた途端、〈仮面女〉の正体も確認せずにその場から逃げ出してしまふ。そうした「ぼく」の姿からは、皆に見られる側になることへの興奮と同時に、それへの恐れと抵抗も伺えるだろう。しかも、「ぼく」は〈仮面女〉が「妻とよく似ている」と感じながらも、掲示板に張られた〈仮面女〉の写真を見ても、舞台上で実際の姿を見ても、「そんな気はしないでもなかったが、確信は持てなかった」、「認めずに済ませられるのなら、すませたかった」として、妻であると断定することをあくまでも避けようとする。そこには、一方的に他者を見ることによって、相手が何者であるかを規定するのを忌避する「ぼく」の意識が描かれているのだ。

先にも述べたように、ノートⅠからノートⅡに移行するにつれて、「ぼく」は見る欲望と見せない欲望に目覚めていく。それは、ノートⅡにおいて、溶骨症の娘の行方を探ろうとする副院長に曖昧な態度をとることで、自らの内面を見せないようにすること、またそれによつて副院長を焦らせ、副院長自身の告白を引きずりだそうとする「ぼく」の態度に現れている。そこでの見せない欲望とは、要するに見られることなく、相手を、一方的に見ようとする欲望のことである。すなわち、「ぼく」はパノプティコンの監視塔のように不可視の存在になることによつ

て、副院長を一方的に見ることを目論んでいるのだ。しかしそれでは、ノートⅠで現れるような、権力に自ら服従する規律訓練型の主体から脱することはできても、結局のところ、パノプティコンの見られずに見るという権力構造の頂点、要するに監視装置の頂点を成す監視塔に移動しただけであつて、規律訓練型の構造自体から抜け出すことはできないということは、既に述べた通りだ。それに対して、付記の「ぼく」が仄めかしているのは、誰にも見られたくない、見たくもないという欲望なのである。

このことを踏まえたうえで、改めて『密会』のラストを見てみよう。「ぼく」の言う「明日という過去の中で、何度も確実に死に続ける」とは、監禁された際に発見した「明日の新聞」のことを指していると思われる。この新聞には、「一面トップに、二本ペニスの馬人間と、オルガスム記録保持者である〈仮面女〉との、熾烈な交合の様相」が掲載されている。前夜祭の次の日の記念式典の様子が書かれたその新聞は、前夜祭当日に捕まつて監禁されてから、日数の経過さえも解らない暗闇の中に閉じ込められてしまった「ぼく」にとつて、越えることのできない「明日」でもあり、とうに過ぎ去つた「過去」でもある。そして、その新聞の中で「何度も確実に死に続ける」とは、新聞内において「ぼく」が、既に死亡者として処理されていたことを示唆しているのではないだろうか。つまり、「ぼく」は「明日の新聞」において、一方的に物言わぬ死体として規定されてしまったのである。これはまさに、死者として一方的に見られるという点

において、極限の客体化であると言えるだろう。

だが一方で、付記では、ノートⅠからⅢまでには登場していた、書いている現在の「ぼく」が姿を見せなくなることも看過してはならない。要するに、「ぼく」が今どこで何のためにこのノートを書いているのが明確に示されないまま、前夜祭に乗り込んだ「ぼく」が監禁されるまでの話が語られるのである。「懐中電灯の電池が切れ」たことで「時計も見えな」くなった暗闇の中でノートを書くことは不可能であるため、「ぼく」は監禁された場所から何らかの方法で脱出し、どこかで付記を書いている筈なのだが、その現在が語られることはない。つまりそこでは、書いている現在の「ぼく」が意図的に消され、読者からは見えないようにされているのだ。しかも、前夜祭のオルガスム・コンクールに参加していた（仮面女）は本当に「ぼく」の妻であったのか、「ぼく」は妻と共に病院を脱出することができたのか、そうした謎の一切は明かされることなく、物語は「やさしい一人だけの密会を抱きしめて……」という一文によって、唐突に閉じられるのである。そこから浮かび上がってくるのは、「明日の新聞」に一方的に死者として客体化されながらも、それに抗うべく、「ぼく」自身の生死すらも曖昧にし、空白にしてしまうことで、誰にも見られまいとする「ぼく」の姿に他ならない。

ただし、繰り返すように、こうした付記に現れる見られたくないという欲望は、ノートⅡにおける見せない欲望、より具体的に言えば、誰にも見られることなく相手を一方的に見ようと

する欲望とは異なるものである。むしろそれは、見られたい欲望との闘ぎ合いの中で理解されるべきだろう。すなわち、ノートⅡで「ぼく」が溶骨症の娘の行方について曖昧な記述することわざと空白を残していたのは、それによって読み手である副院長を焦らせ、その告白を引き出すためであったのに対して、付記の「ぼく」が妻の行方や自らの生死について書こうとしないのは、読者にその解釈を委ねようとしている可能性があるということだ。それは、パノプティコンの監視塔のような、一方的に見るだけの不可視の存在になろうとするのとは真逆の、むしろ読まれる＝見られることで、複数の書かれている「ぼく」を生み出していく行為となるだろう。なぜなら、書かれている「ぼく」は読者の解釈の数だけ存在することになるのだから。だが、そうして無数の書かれている「ぼく」が生み出される一方で、書いている「ぼく」がどこに在るのかを読者が突き止めることは決してできない。このように、付記に現れる見られたくないという欲望は、見られたいという欲望との闘ぎ合いの中で、読者に解釈を委ねることで複数の「ぼく」を生み出しつつも、その解釈に明確な答えを提示しないことで、そこに収まりきれない「ぼく」を一方で作り出すという行為として現れるのである。^{注13}

では、このような「ぼく」の姿は、ポストモダンの自己からいかにして免れているのだろうか。既に述べたように、『密会』自体が問題提起的に露わにしているポストモダンの機制とは、内と外からの自己の断片化によって、誰かに見られることで自

分を確かなものとしたという欲望に駆られるが、そのこと自体がますます自己の断片化を促進していくという、終わりのない円環構造そのものである。それは、今日の社会においても、実は秘かに進行しているのではないかと思わせるに十分なものがある。そして付記の「ぼく」もまた、自らの生死すらも曖昧にすることで、読者の興味を煽り解釈を誘っているように見える点で、誰かに見られたいという欲望から逃れられてはいない。また、書かれている「ぼく」は、読者の数だけ増加し断片化していくという点において、外からの断片化をある面では被っている。しかしその一方で、書いている「ぼく」は、まさに自身の生死すらも曖昧にするという記述の空白化によって、「ぼく」自身の姿を見られまいとし、読者に一方的に解釈され、規定され、またそれによって断片化されることから、ぎりぎりのところで逃れていく。しかも、付記は時間軸がバラバラに断片化したノートⅢとは異なっており、過去―現在の連続性を持つ一人称の物語として書かれている。そこでは、外からの断片化をある面では被りながらも、内での断片化をかううじて免れている「ぼく」の姿が立ち現れているのだ。

ただし、そのような「ぼく」の姿は、決して近代のプライバシー概念が前提としていたような、一貫した自己を持ち、自らの行為を自分自身で統御する主体であることを意味しない。それは、付記が副院長に向けて書かれた「報告書」ではなく、多数の読者に開かれた物語として書かれていることから明らかだろう。そこで書かれている「ぼく」は、読者の解釈によって

無限に増え続けていくものであり、その拡散を「ぼく」自身は決して統御できないが、一方ではそこには決して回収されることのない、書いている「ぼく」が存在している。この二つの「ぼく」の聞き合いの中で行われる、書くという行為こそが、『密会』における新しい自己のかたちには他ならない。そしてそこには、一貫性のある主体を夢想するのでもなければ、一方的に客体化されるばかりでもない自己の姿が立ち現れているのである。そして、そのような新たな自己の可能性を提示していることこそが、『密会』の持つアクチュアルな可能性なのだ。

注

1 詳しくは拙稿「安部公房『密会』論——盗聴システムの権力性」(『学習院大学国語国文学会誌』64号掲載予定)を参照のこと。

2 規律訓練型権力とパノプティコンについては、ミシェル・フーコー『監獄の誕生―監視と処罰』(田村俣訳、新潮社、一九七七年九月)を参照のこと。

3 告白の規制については、ミシェル・フーコー『知への意志』(渡辺守章訳、新潮社、一九八六年九月)を参照のこと。

4 ポストモダンにおける「大きな物語の凋落」を最初に指摘したのは、原語版が一九七九年に発刊された、ジャン・フランソワ・リオタール『ポストモダンの条件』(小林康夫訳、水声社、一九八九年六月)である。リオター

- ルによれば、「大きな物語」とは近代国家を運営するための基礎となるシステムのことであり、思想的には人間中心主義や理性中心主義、政治的には国民国家体制や官僚制として、経済的には大量生産と大量消費によるフォードイズムの体制として現れてきたという。ところがポストモダンでは、こうしたシステムが弱体化することで、人々が生きる基盤としての規範や理念に揺らぎが生まれてきたのだとリオタールは述べている。
- 5 上野千鶴子は『〈私〉探しゲーム―欲望市民社会論』（筑摩書房、一九八七年一月）で、「他者の視線でプライバシーをのぞかれなくては、もう自分がだれかを確かめることもできなくなった」のがポストモダンの社会である」と指摘している。
- 6 大黒岳彦『情報社会の〈哲学〉―グーグル・ビッグデータ・人工知能』（勁草書房、二〇一六年八月）
- 7 大澤真幸は『生権力の思想―事件から読み解く現代社会の転換』（筑摩書房、二〇一三年二月）において、個人が見られることへの欲望から進んで告白するようになったことの例として、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（通称SNS）を挙げている。「TwitterやFacebookといったこれらのサービスでは、人々は絶えず自分の現況について呟くことで、リツイートや「いいね」といった他者からの反応を得ようとしている。大澤によれば、そうしたサービスが駆り立てるのは「常に見
- 8 られるが、しかし見られていないかもしれない」という感覚であり、人々はそれによって見られたい欲望を増幅させていくのだという。
- 9 ジークムント・バウマン『リキッド・モダニティー―液化化する社会』（森田典正訳、大月書店、二〇〇一年六月）ただし、ノートⅠでもノートⅡでも、本来括弧内において書かれるべき、書いている〈現在〉の「ばく」の情報が地の文に書かれたり、反対に地の文において書かれる筈の書かれている〈過去〉の「ばく」＝「男」の情報が括弧内に登場したりする。だとしても、以下に述べるように、ノートⅢにおいて現在と複数の過去が入り乱れる語りが前景化していくことは重要であろう。
- 10 阪本俊生『ポスト・プライバシー』（青弓社、二〇〇九年一月）
- 11 例えばAmazon.comのウェブサイトでは、消費者のそれまでの購買履歴を分析することで、消費者の趣味嗜好に合うような商品を勧めてくる。また、アメリカの保険会社や薬品会社では、顧客の遺伝情報を用いて、発症リスクの高い疾患を特定し、顧客ごとに勧める薬やサービスを变えるということまでが行われている。
- 12 斉藤環は『解離のポップ・スキル』（勁草書房、二〇〇四年一月）で、ポストモダンの社会とは「解離への圧力」がかつてないほど高まっている時代であると指摘している。「解離」とは「記憶や同一性、感覚や行動のコント

ロールが失われる」病であるが、ポストモダンの社会では、場面場面に合わせてスイッチを切り替えるように、自らの人格ごとそのつど取り替えていくようなコミュニケーションスキルが求められるという。それは、ここで述べているような、一貫した意思を持つ主体としてではなく、バラバラの個人情報を組み合わせからなる存在として個人が扱われることにも通じている。

このことを踏まえた上で、改めてノートⅢを振り返ってみたい。既に述べたように、ノートⅢの「ぼく」は妻を追いかけてながらも溶骨症の娘を誘拐した理由について自分自身でも説明することができず、自分が何者かというアイデンティティーを失いかけている。そこで「ぼく」は「納得できないのはなにも僕だけではないはずだ」と読者に語りかけることで、何故「ぼく」が溶骨症の娘を誘拐したのかについて、読者に「真相」を究明してもらうよう誘いかけている。そこには「ぼく」の見られたいという欲望が現れているが、しかし、付記と同様に、その「真相」は最後まで明かされることはない。それは、「ぼく」自身のアイデンティティーに揺らぎが生じているためだとも考えられるが、「ぼく」は記述にわざと空白を残すことで、「ぼく」自身の姿を見せまいとしているのだともとれるだろう。このように、見られたい欲望と見られたくない欲望の闘い合いという文脈に置くことで、ノートⅢにおける「ぼく」のアイデンティティーの

揺らぎと、そこから生じる記述の空白は、一方では読者の解釈から生じる複数の「ぼく」を招きつつも、他方ではそこから常に逃れていく「ぼく」を生み出す行為として、読み替えることも可能になるのである。

付記 『密会』の引用は『安部公房全集26』（新潮社、一九九九年一二月）に拠る。

（かたの・ともこ 博士後期課程）